
キ オ ク

美菜彌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キオク

【NNコード】

N0723F

【作者名】

美菜彌

【あらすじ】

この物語の主人公、風凜華魅麗は、姉の冬彌の通っていた憧れの学校である“桜坂学園”に入学！そこで出会う人物たちと楽しい学校生活を送ることとなつた。魅麗はここで一体何を学び、何を残せるのか。魅麗の華やかな高校生活が始まるのです。

第1話・はじまり（前書き）

こちらの作品は気まぐれで文章力のない者によつて書かれた物語です。なので、文章の表現や誤字・脱字などがあつた場合は見逃していただければと思います。

では、暇潰しなどにどうぞお読み下さい。楽しんでいただければ光栄です。

第1話・はじまり

とある春の晴れた日。私はこの日がとても待ち遠しかった。だつて…今日から私は高校生になれるから……。ずっと憧れてた、姉と同じ制服を着れるその日を…。でも、やつと叶つたよ。お姉ちゃん。

心のなかで、此処にはいない姉に話しかける。姉の優しい顔が、私の頭の中をいっぱいにした。今は会えないけど、会つた時には私の制服姿を見せてあげるね。

鏡の前に立ち、くるりとそこで一回まわる。少し遅れてスカートがひらり。この制服は姉が着ていたときからずっと可愛いと思つていた。そんな制服と私は釣り合つてない気がした。だつて…まだ中学生つて感じのオーラが出てるんだもん！！

少し大人ぶつた表情を作つたがそれをすぐ崩す。そして頬をふうふと膨らまし、ぺしんと叩いて潰す。

何落ち込んでるの…！…これからじゃん…！…まだ中学生みたいのは仕方ないよ…！

自分に気合いを入れて、きつと待つてこむであらう母のこむ一階へとおりていくことにした。

寝室のある屋根裏部屋から、キッチンのある一階まで小さい梯子と螺旋階段を使っておりていく。

キッチンのある部屋の扉を開くと、朝食の美味しそうな匂いと、いつも母が飲んでいるコーヒーの香ばしい匂いが私に染み込む。そんな心地のよい空気を愉しんでいると、母の声が聞こえる。

「何そんなどこに立つてゐの？」「飯が冷めちやうよ。」

いつも通りの優しい声。その声のするまづを見ると優しく微笑む

綺麗な顔がある。

自分の母親の顔なのに“綺麗”なんておかしいかもしないけど、これは本音。私はお母さんみたいな美人になりたいと思つてゐる。

……そして、姉みたいな美人にも……。

私は母に返事を返し、朝食の置いてあるテーブルのもとまで寄つて、椅子を引きそこに座る。私は思い出したように母に、

「おはようー」と元気な声で言つと母は落ち着いた声で返事を返してくれた。

「いただきまーすー！」

「はあい、どういわ。」

「んな毎日の当たり前のやり取りはやつぱりいい。心が落ち着いた。

私が美味しく朝食を食べていると、急に母から声がかかった。

「今日から高校生ね。その制服、とっても似合つてるよ。」

その言葉は、とても嬉しかつた。似合つてないつて心配してたところだつたから……。

「きつと卒業までには冬彌^{ふゆま}より似合つようになつてゐると思つわあ。」

「もあー、卒業つて…入学式もまだ出てないんだよー早いつてば。」

入学式を前に少し緊張していたのに、そんな風に言われて少し可笑しかつた。

朝食を綺麗に食べ終えて、身支度を終わらせ、いつでも学校に行

けるようにして、私は外に出た。

外に出ると、眩しい朝の気持ちいい日差しに、澄んだ空気が私を出迎えてくれたような気がした。こっちの方には人が滅多に来ないから、此処を独り占めしている気分だ。

長い長い坂道の途中にある私と母の家。そこからの景色は最高！きれいに並んだ町並みがおもちゃみたいに小さくて、可愛いらしい。この町には海も山もあるし、それらを全部まとめて眺めることができるんだからとっても気に入ってしまった。

そして家を出て、坂を上つていき、家の裏側までまわる。そこにはとても広い草原が広がっている。此処に立つてみると、自分がとても小さく見える。でもそれは虚しいっていうよりも、のびのびとした広い気持ちになれる。だから、此処も好き。

草原にくる途中には別れ道があつて、その道を真っ直ぐ進んでいくと、小さな森のような林のよつな場所がある。そこには小さい頃に、何度か来たことがあった。

そもそも長い長い坂道に広がるこの世界は、母方の叔母の所有している土地なのだ。

こんなに広い土地を持つているなんて凄いと思つ。私がこっちの方の学校に通うことを知つて、此処を貸してくれると言つてくれたのだ。でも、そのお陰で、私はそこまで朝早く起きなくて済んだし、バスとかの機関を使わなくて済んだ。だから叔母さんには感謝だ。

私は、小さな森の方に向かつて歩きだす。こんなにいいといふ人の人が滅多に来ないのは、きっと私有地だからだ。

森の入り口の前で一旦立ち止まり、先に進んでいく。

懐かしいような

新しいような

そんな

不思議な感覚

ある程度まで森の中に入つたといひで視界にピンクがはいる。さ
っきまでミドリばかりだったので、そちらを振り向く。そしてつい
言葉を漏らす。

「綺麗……。」

円を描くように生えるミドリと、中心に優雅に佇むピンク。その
光景は初めてで、見とれていた。私の口を虜にするそれ。つい
絵でも描きたくなる。

ぱーっと眺めていると後ろから明るく元気な声が神秘的な空間に
響き、此処はやっぱり現実の世界などと我にかえる。

……つて……。

「誰ー?」

ぱーっとしおぎで話しかけられたことをスルーしてしまつといひ
だつた。

誰もいないはず……誰も来ないとつてた。

だけど、声がしたつてことは人がきたつてことだ。しかも男の人の
声だから、母でもない。

まあ、立入禁止ではないからいてもおかしくはないけど……。といひ
人つてくるんだあ。

そんなふうに思つてゐると……。

「ああ、悪い。俺は大空おおぞら 拓魔たくま つて言つんだ。」

元気で明るい声。その声の持ち主は拓魔くんっていうんだ。

後ろをゆっくり振り返ると、私と同じ服を着た男の人がそこには立っていた。スマートなのに筋肉がしつかりついた身体。顔立ちは華があり整つて、カッコイイと思う。髪は明るい茶色の中に赤や金、オレンジ色がところどころに混ざつている。

私がじつと彼を観察していたのが気まずかったのか、彼は口を開いた。

「ええ… つと… 君は… ？」

そうだった。相手に聞いておいてまだ自分は名乗つていなかつた。私は慌てて名乗る。

「あたしは風凜華 ふうりんか 魅麗 みれい はじめまして。」

「はじめまして！」と笑顔で言つてくれる。

「俺わあ、よく此処にくるんだあ。でも人にあつたことなかつたら、誰も来ないのかと思つてたんだ。」

もう言つ終えると、こちらに近づいてきて、私の横に並ぶ。やっぱこの人… 深く背が高い。それに近くで見てもカッコイイし。

「魅麗ちゃんは此処、よく来るの？」

“よく”かあ…。引っ越したばかりだから、“よく”ではない。しかも借りてるとはいえ、今は私たちの土地だしひどい。何て答えようと考えていると、彼が少し首を傾げる。

「どうしてンな難しい顔してんだよ。あつ、俺…へンなことでも聞いたか？」

難しい顔…してたんだ…私…。言われて気付く。

「変なことなんて、何も言つてないじゃない？ 黙つてて『ごめんね？』何て言つていいのかつて…そう呟つてたの。」

私の言つた言葉に“？”を浮かべたような表情をする。やつぱ、おかしいかな…？今いつたこと。沈黙を彼は破るよつて言つた。

「てかわあ、お前も俺と同じ高校なのな。スゲエ偶然だよな…！」

満面の笑みを向け、そう言つ彼。あまりにも明るすぎるの声に笑つてしまつた。彼は怪しむよつて…

「なつ！？…………何だよ…………。お前が難しく顔してるから話題かえたら笑い出しあがつてよお…ヘンなヤツ…！」

そう言つ終えると、彼は私の頭をがしがしと乱暴に搔き回す。髪型は酷く崩れてしまつたのに怒りなどの感情はなく、かわりに親しみのような心地よい感情でいっぱいになる。

不思議だなあ…。彼とは、ずっと前から仲が良かつたみたいな感覚になつている。

私は思い切つて頭に思い付いたままに話してみることとした。

「やつあきの質問…」

「えつ？」

笑つっていた私が急に喋り出したからか、目を丸くして手を止めた。

「小さい頃から、此処には何度か来たことがあつたの。でも、貴方みたいにずっとじゃない。だけども此処は私の大事な“モノ”になつてゐる…。」

私が話し終えたのを確認して、彼は質問をしてきた。

「私のつて…どういう意味？」

彼は少し困った顔をしてるよう見える。

それはそうか。今まで自分がずっと來ていたところを自分のモノと宣言されたんだから。

きっと此処が叔母の私有地だつて知らないんだろうなあ…。

「実は此処つて、私の叔母の私有地なの。」

「へ……？ そなの……？」

あー…。やっぱり知らなかつたか。それもそうだと思う。此処つて私有地に見えないし。“市民の場所”つて感じだし。私だつて初めてきいた時は信じなかつたし。

「それで、叔母さん、優しい人だから、此処を今は私達に貸してくれるの。高校から実家までの距離、かなり遠くて大変だから…。」

笑顔でそう言つと、彼はしばらく目をパチパチさせてから、「なるほど」と呟く。わかつてもらえたみたい。

「それで何て言つていいか困つてたのか。今は自分の家だもんな、よく来るとかの次元じゃねーもんな！」

明るい声が耳に響く。そして、綺麗な笑顔を見せてくれる。

「「めん…！」

いきなり謝る彼。私は不意打ちだつたので、きつと変な顔をしたと思つ。

「何で…謝るの？」

何とか絞り出した声。上擦つているのが自分でも恥ずかしいくらいにわかる。

「だつて…俺…他人の土地に侵入してたつてことだろ？……何年も…。」

顔を赤くしながら言う彼が、何だか可愛いく見えてしまい、駄目だとわかつていても笑つてしまつ。

……だつて…絶対可笑しい！長身の綺麗でカツコイイ顔立ちの高校の制服着た男の人が、小学生みたいに頬を染めながら言つてるんだもん。釣り合つてないし…！

でも、彼の気持ちはちゃんと伝わつた。それに……。

「いいんだよ？だつて此処は立入禁止じゃないんだしさ。それに、こんな場所があるつてわかつたら私だつて毎日来たい…！…って思うしさ！だから、いいんだよ？今までだつて…そして、これからもね！」

思つたままのこと伝えると、彼は嬉しそうな顔をした。

「なあ…俺等。もつダチ…だよなー?」

「もちろん!」

私たちはお互に微笑み合つた。

「なあ…お互いさ、親しみの気持ちを込めて、NMで呼び合わね?」

「NMかあ…いいかも!それ!」

「いいねえ、喜んで!」

私は笑つて親指を立てて、オッケーの手を作り、そう言った。
彼はたちまち笑顔になる。この人の笑顔つて人を凄く虜にする力
があると思つ。実際、私は虜になつてしまつたし…。
そう思つていると、声がかかる。

「普段さあー、NMで、どんな風に呼ばれてる?」

「アタシは“みい”とか、“れい”かな?」

真つ先に思い付いた、よく言われてるNMを挙げる。すると…

「やっぱ在り来りはつまんねえし、俺が呼ぶからこま、人が呼ばないのにしねえと…。」

「うーん…あんまり恥ずかしいにならないといいなあ…と思ひながら様子を伺う。

「よし！決めた！！」

「アツと、花が開いたような表情をする彼が少し眩しい。

「なにになに？？」

「れつちゃん……！」

「くつー？」「

自覚する…。今、凄い間抜けな声出したって…。何か…恥ずかしい。

「…………ダメ？」

小動物のような凄く心配してる声と表情。…可愛いなあ。男の子なのに。

「駄目なわけないよー…。凄く嬉しいー。ありがとうー。」

やうやく、彼の安心した表情が目に飛び込む。

「じゃあ、俺は“れつちゃん”なー。」

自分で言つて、少し恥ずかしくなったのか、頬を赤くしてゐる。そんなところも可愛いと想つ。

「いいねえ、“れつちゃん”…。」

私も言つてみて恥ずかしくなつた。でも、それは心地いい恥ずかしさ。

「俺のことやうやつて呼ぶヤツいねえから……一人だけな……？」

ヒミツゴト。

そんなに重大ではないけれど、一人だけつてのが凄く嬉しい。

「じゃあ……私のこともやうやつて呼ぶ子いなから、一人だけね。」

笑顔を向けてやうやうと、さつき私が手で作った、親指を立てたカタチを作り、

「当たり前！……」と言つてくれた。

今まで男の子と、やうやつてあまり話をなかつたから、少し新鮮な感覚だった。

その時だった。

「あつ……メールだ……つて……！」

「どうしたの？」

呑気な私の問い掛けに、慌てた様子で携帯の画面を見せてくれた。そこには、少し寒氣がする事実があつた。

「ち……遅刻……！」

入学式の日に遅刻なんてアリエナイよ！

私は彼の制服の袖をガシッと掴むとそれを引っ張り、走り出した

。。

走つて、はしつて、ハシッテ……。

。。

長い坂道を勢いよく下った。何度も躊躇そうになるが、転ぶことはなかつた。どんどんスピードがつき、長かつた道のりもあつとう間つて感じがした。

くつちゃんと私の自転車がある場所までつき、勢いよくブレーキをかける。そして少し息を整えてからお互い自転車にまたがつた。

「よしーー 行くぞーー」

「うんーー」

私達は田一一杯に自転車のペダルを漕ぎ、私達の目的地である“桜坂学園”へと向かつた。

第1話・はじまり（後書き）

小説を「」見下さいましてありがとうございます！
精一杯書かせていただいた仮想世界の下らない話しだすが。これ
からもよろしくです。

第2話・楽しい会話

しばらぐ自転車を漕いで、狭かつた道路から、広い道路にでる。すると、同じ格好をした人たちを見つけ、少しだけ安心した。

「ああ～…。つ、疲れた～…。」

「ホントだねえ。お疲れ様！」

くつちゃんはハンドルに体重を預けるようにもたれかかる。まだ“お疲れ様”なんて早いけど、こんな様子を見ちやつたらそれしか声がかけられない。

「れつちゃんつて、かなり足早いね～。ビックリだよ。」

疲れた顔で軽く笑顔を作りながら私に振り向きそう言つ。まあ、よく、みんなに言われる。私つて運動は“出来ない”つていうか“しない”つてイメージがあるらしい。汗が似合わないとか言われたこともあるし…。

「よく言われるよ。でもね、アタシ…。」

「なになに？？」

くつちゃんのさつきまで疲れた顔が嘘のよつた満面の笑みが私に向けられる。

「実は、中学のときは陸上部に入つてたんだ。あ、ちゃんとした選手だったよ？」

少しおどけたように言つてみせると、凄く驚いた顔をされてしまつた。まあ、それも結構慣れたけど……。

「マジかよお……。すっげえなあ……。全然見えねえし。」

「わーー、くつちゃんまでわざわざつけて言つんだー。」

少し困らせたくてわざと怒つた風にいつてみた。
すると、すぐに

「『メソーーー』と慌てて言つてくるものだから可笑しかつた。」

「なあに笑つてんの……？」

「『めんね？ 大丈夫だから。わきはつとからかつてみたくなつて……。』」

笑いながらそう言つたら、くつちゃんは
「ンだよー」と安心したような表情で笑つた。
くつちゃんつて、いちいち表情が面白い。だからちょっとだけからかいたくなつちやつた。

「でも、人は見かけによらねえな。俺でもわきはついく大変だつたし……。」

“俺でも”ってところが少し気になつた。くつちゃん、何か中学生のときやつてたのかな？確かに、きれいに筋肉はついてるけど……なんだるーっ。

私が急に黙りこんだのを見て、不思議に思つたのか、不安そうにきいてきた。

「どうした？ 具合でも、悪くなつたか…？」

「違うよ。ただ、気になつたことがあつてね…。」

「ン？ 何だよ？ 言つてみるよ。」

優しい笑顔だつたので、きこつてみるといつた。

「何か中学生のときに運動してたの？」

「ねー…よくわかつたな…。」

何だか、急に嬉しそうな顔になつた気がした。

「何やつてたの…？」

くちゅやんが中学生のときやつてしたこと。何故だか凄く興味が沸いて来た。気になる感じ。私の知らないくちゅやんのこと、少しでも知りたいのかも。

「俺とい、小さい頃からずつとテニスやつてたんだ。中学の時には全国を目標すべつだつたんだ。」

テニスのことを話すくちゅやんの顔は凄く輝いていた。夢を語る少年の瞳だった。

「まあ、実際は…全国は無理だつたけど、那儿で活躍したんだぜ？」

そのあとに“なーんてな”と付け足すと、悪戯っ子のよつたな笑顔を見せる。

くつかやんには素晴らしい田舎があるんだな…。そんな風に思つた。

そういえば、“オオゾラ タクマ”って何処で聞いたと思つたら、全校集会で校長先生が言つてたんだ。この町から大きな大会にでる人がいるつて話しだつた。

「つひの学校でも、結構話題になつてたの…今更だけど、思い出しだよ。」

笑いながらつづりこつと、くつかやんは凄く嬉しそうな顔をした。

「マジで…？ うわあ～…嬉しいなあ～…。」

本当に嬉しいんだろうな。見ていて伝わつてくるよ。

「れつちやんはさあ、何処の中学校行つてた？」

「アタシは浜咲中学校だよ。」

「嘘お…マジかよ…。」

何をそんなに驚いているんだろう。私…変なこと、言つた覚えないよ。

「あつ…？ …悪い。浜中つて頭いい奴ばっかじやん？」

こきなりそうきかれて、少しビックリした。自分の通つていた中学校を、そう思つたことは一度もなかつた。だから言わわれてもピン

と来ない。

「れつちゃんって…確かに勉強出来そうだもんなん…。」

「そう見える??.」

「ああ…。何か急に見えてきた。」

出身校って、そんなに人のイメージを変えちゃうんだ。でも、確かにそれは言てるのかもしれない。でも…中学校だしなあ。

「まさかあの浜中で有名になるとま、嬉しいぜ…。」

「くわちゅんはわう言つて笑つた。そして私も笑う。

「くわちゅんは何処の中学校に行つてたの?」

「俺か?」

「うん!」

私は大きく首を縦に振る。

「俺は桜坂中学校に通つてたんだ。だから高校も桜学を選んだし。」

“桜坂中学校”。そこは、部活動（特に運動部）が強いことで有名で、部活で良い成果を残した生徒は学費や入学金免除などの待遇で、桜坂学園に入ることができるのだ。軽くエスカレーター式みたいなところがある。そのため、桜坂学園には桜坂中学校出身の生徒が多いのだ。

「そりなんだあ。凄いね！推薦で入学したの？」

「まあな！ 親も学費が安く助かる～とか言ってたしな。」

桜中の生徒だったんだあ。何て思つていろと、くつかやんから質問される。

「れつちゃんは何で高校、桜学選んだんだ？ もしかしてスカウトされたとかー？」

くつかやんが興味津々といった風にきいてきたのが可笑しかった。

「スカウトなんて…。私は桜学の」とすつと憧れてたから、ここにしたの。」

「憧れ？」

くつかやんが不思議そうな顔をしながら首を傾げる。

「そりー！ 憧れ！ 私のお姉ちゃんがここに通つてたから…。それで、こここの高校が気になつて…。入学できたらなあつて憧れてたの。」

ずつと心に抱いていたことを、恥ずかしいけど、くつかやんに話した。すると…。

「いいなあー…。そりこの理由も。俺は長男だから、兄弟に憧れるなんてないし。」

何かを懐かしむような、少し哀愁のある表情を向けられ、少しど

キッとした。

「くつちゃんには……弟や妹がいるの？」

「ああ、生意気な弟が、一人いるよ。しかも今、ソイシと暮らして
る。つてーか、勝手についてきやがったんだ。」

少し眉間に皺をよせ、怒った表情を作る。でも、どこか、楽しそ
うにも見える顔だった。そう、それは“兄”の表情だった。

「お父さんやお母さんは？」

「あー……。」

今度は困った顔してゐる。きいたやまづかつたかな？

「そもそも、俺は一人暮らしをしたかったんだ。」

くつちゃんは私に話してくれるみたい。失礼なこときいたんじや
なくてよかつた。

「それで、両親に『一人で暮らす』って言つたんだ。はじめは心配
してたけど、認めてくれた。でも、弟だけは反対しやがつてよお…。
はじめは一人暮らしを満喫してたのに、一週間くらいたつた頃に、
『俺も此処に住む!』ってきやがつた。親は止めたけど無理だった
つて…。」

くつちゃんは一通り話しあると、

「はあ…」と溜め息をついた。何だか大変そう。でも…。

「楽しそうだなつ。」

と、思った。

一人暮らしをしたかつたくつちゃんの気持ちもわかるけど、私はどちらかといふと、弟の気持ちがわかつた。だつて……、大好きなお兄ちゃんが急にいなるなるつて寂しいことだから……。

「まあ、賑やかつて意味では楽しいけどよ……。一人暮らしをして、独り立ちしたかつたつて意味では、何かなあーつて思うよ。親も心配だし……。」

「親……？」

具合でも悪いのかな……。いや、だつたらくつちゃんのことだから一人暮らししなんてしないと思つ。じゃあ……どう心配なのかな?

「そ。だつて俺の両親さあー、俺一人いなくなるつてだけで大変だつたのに、さらに弟までついてきたら……寂しさのあまりやつていけないんじやつて……。」

「ふふつ……。あははつー。」

私はつい笑つてしまつた。本当に楽しそうな家族だ。それに、くつちゃんの親が凄く可愛い!

「お前……今馬鹿にしだらう……。」

「じつないよー。」

そんな抵抗を無視していくつちゃんは片手で私の髪の毛をぐしゃつ

とした。

「俺を馬鹿にした罰だ。」

ちょっと威張った風で言ひつけられた。…本当に馬鹿にならしてないのになあ…。

「そんな家族、樂しかったなって、呪つて。羨ましくなって。」

「はあ？ 何でだよ。普通の家族だろ？」

「だつて…私のお父さん、海外にいるからだー…」

そう。私にとつては、両親が一人そろつて普通の会話をじつてだけでも、羨ましい話だつた。

「それでかあ。悪いな、馬鹿にしたなんて疑つてさ。」

「くつちやんは気まずそつに謝つた。

「全然いこよ。ただ、馬鹿になんてしてなこつてわかつてほしかつただけ。」

「もつ疑つたりしねえよ。」

もつ言つてくれて、本当に嬉しかつた。

「やつだー！ 今度俺ン家に来ねえー？ つねにこいつに賑やかな弟と歓迎するぜ？」

えつ！？

「あつ……やつぱ嫌だよな……。今日知り合つたばつかのヤツに「んな」と言われるの……。」

別に……嫌じやないのに……。寧ろ私なんかを家によんでくれるなんて、凄く嬉しいのに……。普通、会つたばかりの人を家に招こうなんて思わないんじやないかな？

「そうだ！ 今度俺ン家に来ねえ！？」うるさいくらいに賑やかな弟と歓迎するぜ？」

「えつ！？」

「あつ……やつぱ嫌だよな……。 今日知り合つたばつかのヤツにこんな」と言われるの……。」

別に……嫌いやないのに……。寧ろ私なんかを家によんでくれるなんて、凄く嬉しいのに……。普通、会つたばかりの人を家に招こうなんて思わないんじやないかな？」

「嫌だつたら断つていいんだぜ？」 ただ、さつき弟のこといいなーみたいに言つてたからさ。」

「じゃあお家に遊びに行かせてもらひな！」

「いいぜ！……じゃあ、今度の日曜は？」

「大丈夫！ じやあ日曜日に…。何処で待ち合わせしようか？」

私の心の中は、朝からとても畳のこ氈に染まっていた。これもくつむやんのお陰だな…。

「じゃあ、俺がお前ン家行くな。」

「ここなの?」

「ああー、じゃあー0時頃行つてもいいか?」

「いいよー。じゃあ楽しみに待つてるねー。」

「おひー期待してりやー。」

“期待してりやーか……。つん、樂しくなつやー。』

約一週間前、叔母さんに家を借りてこひちに来た時は荷物の整理とかで忙しかつたし、学校生活がとても不安だつた。しかし、今、今、くつちやんといつしていふと、その不安は小さくなつていていた。こんなに楽しい友達が出来て、私はついてるな……。

こんなたわいのない会話をしていると、あつとてひ間に学校が近付いていた。

此処からは長い坂道を登らなくてはならない。でもとても緩やかな坂だからまだマシかな?

「れつちやんと話しながらだつたから、此処まであつとてひ間に感じたよ。』

「アタシもだよー。』

「「」の坂道を登ればもう学校だな。……同じクラスだつたらいいな。』

「

「うふー。」

くつかやんが同じクラスにいてくれたら安心できるし、何より楽しそうだな。そんな春風なことを考へてみると、あんまりに気付いた。

それは…視線。くつかやんをみんなが見ていく気がした。確かにカツコトイと黙つたが、これは異常だ。まるでアイドルがいるみたい。

そんな私に気付いたのか、くつかやんが話しつけてきた。

「どうした？ ンなキョロキョロしてみる。座してござる。」

ふざけた感じだったけど、さつと心配しててくれたのかな。

「ねえねえ…みんながくつかやんを見てるよ……。」

声のトーンを少し抑えてきいてみた。

「ああ…。中学でテニス部に入った時からこんな感じだね…。…始めは変に感じたけど、今はなれた。」

くつかやんは向でもないつて感じで、サクッと呟いた。…凄いな。

「あれ？ …れつかやんは経験ナシ？ れつかやんくらいの容姿なら経験アリかと思つてた。」

…普通ないんじやないかな？ 私、くつかやんみたいに周りを明るくするような性格じやないし……。

「きっと、くつちゃんが特別なんだよ。」

私がそういうと、くつちゃんが“意外”といつよつた表情で言つた。

「でも……俺にはれつちゃんにも視線が集まつてゐるよつて見えるぜ？」

「なつ……！？」

“何言つてるの！？”つて言おうとして、言葉が詰まる。私何かに視線が集まるわけない。だって、この学校つて、大半の人が桜坂中学校の生徒だし……。私は有り得ないよ……！そう思つていると、誰かの会話が耳に入つてきた。

「ねえねえ！！ あそこの一入……！ たつくんと風凜華さんじやない！？」

「ホ……ホントだあ……。一人そろつてると画が綺麗だよね……。」

「てかさあ、二人つて仲いいのかなつ？」

「何か羨ましいなあ……。」

……何か今……私の名前出なかつた！？
何……なに……ナニー？

「なつ？ お前も見られてるだろ？」「

くつちゃんも聞こえてたみたい。

何か悪戯っぽい表情で笑つて、そんな風に言われちやつたよ…。

「れつちゃんつてば、鈍感だなあ～～。」

凄い笑われてる……。そんなに笑わないでよ～。

私が恥ずかしくて何も言えず、大人しく自転車を漕いでいると、もう学校前だつた。

視線が余計に集まる。視線に気付いてからは変に意識してしまつ。くつちゃんみたいに慣れてないから、かなり困る…。

自転車置き場に自転車を停めて、玄関の方に向かっていく。クラスを確認するために。でも、人が沢山いて近付けないや…。

「まだ結構人いるな。遅刻じゃないだけマシだな。」

「そうだね。これも頑張つて自転車漕いだからだねつ！」

「そうだな。……あつ、一ひとに廻つたらクラス発表の紙、見えそうだぜ。」

くつちゃんが手招きをしているので、そちらに人とすれ違ひながら近付く。

確かにそこから紙は見えた。
そして…私のクラスは…。

「「あつた！！」」

二人の声が同時に響く。お互い顔を見合させて笑つた。

「れつちゃん」と俺…同じクラスだつたな！！」

「そうだね！！」

私は凄く嬉しくって、つい彼の手をとつていた。そしてそれを思い切つつきり上に音がなくなるらいに振つた。

「ははっ…。そんなに喜んでくれるなんて…俺、スゲエ嬉しいわ。」

照れくさそうにそう言つてくつちゃんは笑つた。とても爽やかな笑顔…。この笑顔を教室でもみれるんだ。そう思つと、幸せだつた。

そこで私は冷静になつた。いつまで手を握つてゐつもりなんだ？つて…。私は慌てて手を離した。

「「めんなさ」」…「きなり」」

弱い声でそうこうとくつちゃんは、笑顔で言つた。

「全然いいぜ？…嬉しいしさ。」

「よかつたー…。嫌だつて思われなくて…。」

「そんな風に思つわけないし。でも…ピックリはしたかな？」

につつ笑うくつちゃん。そんなくつちゃんを見て感じる…。つてもいい人だなあ…つて。

「ホント…「めんね？」

「 ンな謝る」とじゃねーだろつ?
っちゃんみれて…嬉しいよ。」
……………たださ、そんなに元気なれ

卷之二

そんなこと聞かれたひ、黙れぢやつよ。

「何かクールって感じでさ…俺みたいな馬鹿といてもつまんない！…って思つてるんじゃないかって…ちょっと氣になつたからね…。」

「そんな」と思うわけ……それこそないの?」

貴方と出会ってから、此処にたどり着くまで、ずっと楽しいって

そんな風に見られてたなんて……ちょっと私って無愛想なのかな？

「そっか…なら、安心。俺ばっか楽しんでたとしたら…ちょっと虚しいなって感じだし…。違うってわかつてよかつたぜ。」

優しい笑顔が、とても眩しく見えるよ。くつちゃんつていつも素敵な笑顔を見てくれる。軽く微笑むような笑顔や、元気一杯！！つて感じに、真っ白い歯を見せて笑う顔も本当…素敵だな…。

「れっちゃん？」　　……どーした？　　ボーッとしてよ？」

「えっ！？」

” どーした？なんてきかれても… “ 笑顔が素敵だからずつと見てた
” なんて…恥ずかしくて言えないよー！

「頬つぺも少し赤いみたいだし…熱でもあんのか？？」

「うわっ…？…？」

「。今変な声出した…！此処周りに人いるし、聞かれてたら恥ずかしいよ…！…聞いて…ないよね？って…！…！…もつと心配すべきことを今されてるじゃん…！…だつて…だつて…！…。くつちゃん、私のおでこに…手当てる…！」

何か…身体…動かない。と言つより、動けなくなってる…。

私の様子がおかしいことに気付いたくつちゃんが、慌てて手を額から離した。…………けよつと寂しいかも…………。

「『メソ…！…俺…癖でつい…。』

癖で…？…つい…？…何でそんな動作が癖になるの…！…やつぱりくつちゃんってモテそだから…それでなの？

…みんなにもやつてるってこと…かな？

何でだろう…。急に悲しい気持ちになつちやつた。やつせまで、あんなに楽しかったのに…。何で…？

“トクベツ”じゃなくて、“ビヨウドウ”だから…？でも…いいじゃない…のけ者扱いよりは…よっぽど、いいじゃない…。

口口口が痛む、そんなシュンカン。

「おひつ…？…れつちゃん…？」

何…？何なの…？もつ…。

「みんなにも……してあげるんだ。」

なつ、何こつてゐるの…？ 勝手に口が動くから…。そんなこと聞
うつもつじやなこのこと…。まだわからなこのこと…。

「えつ？何のこと…？ てか、怒つてゐるのか…？」

「やうじや……なつ。 ただ…。」

「ただ？」

「くつちやん」といて、女の手に触れるつて前だつたの…か
な？つて……。」

「あーあ…。壱いつもりなつて、なかつたのこ…。ビラッ…壱つ
ちやうの…？」

「こんなこと言つたくないよ。」の氣持ちつて…何？別に馴れ馴
れしいとかは、思つてない。私だつて、やつわ手握つつけつたし。
そうぢやない。

だとしたら……何だらう。

私が考え込んでいると、くつちやんが卑し詭なやうつて口を開いた。

「何のことかよくわからんないナゾ、当たり前何かぢやない。今でこ
触つちまつたのは、お前が心配だつたからで…。その…誰にでもと
かじや、ない…から。」

「くつちやん……。」

私が考え込んでいると、くつちやんを困らせてゐる。「みんな、くつちやん。本当は

…そんなこと聞つもつじやなかつた。

「あつがと…。心配してくれて。熱は…ないよ?」

「あつ…つかむ…。」

少ちくなるくつちゃんの声。あつだよね…いきなりそんなこと聞
われたら…え? クリしちゃうよね。

「俺がわつも“癪でつ”って言つたのせや……」

聞きたくないかも…その先の言葉なんて。

「俺の弟がさ、ちびの頃、頬つぺたが赤い時つて、だいたい熱あつ
たんだ。」

……え? いきなり…何の話?

「だから…れつちゃんも熱があつて辛いんじゃないかつて…無理し
てんじやないかつて…。それで、つい…。」

「……やうだつたの?」

「ああ。“口メンなつ。ンな”と、ガキでもねーのに、嫌だよなつ。」

「そんなことない!」

私つてば…ただの勘違いか…。なのに…くつちゃんに変なこと聞
つて困らせて…駄目だな。

何か…くつちゃんとこると、つい感情的になつちやうつてこりか

…くつちやんの雰囲[氣]に呑まれてる…？

でも…くつちやん相手だから素直な」とが言えるのかもしれない。

「そつ…そつか？……でもそつか？」

「あー…。わー…。もうここ…」

それ以上言われたら恥ずかしくって、今よつも真っ赤になつちやう…

「れつちやんがそつこうなひ…やめな。」

フウー…。助かった…。

「そろそろ、校舎の中に入る？」

「そつだな。行くぞ…。れつちやん…。」

私たちは校舎の中に入つていつた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0723f/>

キオク

2011年1月4日04時19分発行